

2020年 英語改革

なぜ、4技能が求められるのか

グローバル化の進展

- 日本国内で働く外国人

| | | |
|-------|---|--------|
| 2008年 | ▶ | 2016年 |
| 約49万人 | | 約108万人 |

- 海外で暮らす日本人

| | | |
|-------|---|--------|
| 2004年 | ▶ | 2016年 |
| 約96万人 | | 約134万人 |

多様な文化や言語を
もった人たちと一緒に
働く未来はすぐそこに

求められる英語力とは？

- 小中高を一貫した指標で目標設定
- 高校卒業時、
CEFRのA2～B1レベル以上を目指す

<CEFRとは>

欧州評議会が作成した、外国語の学習・教授・評価のための言語共通の参照枠組み。能力は「～ができる」というCAN-DOによりレベル定義されている。

レベルA2例：身近な範囲での日常会話ができる

レベルB1例：旅行時、起こりうる大半の情報に対応できる

英語教育、なにが変わる？

- 1 小学3・4年生で「**外国語活動**」が開始
- 2 小学5・6年生で「**英語(教科)**」が導入
- 3 中学・高校の英語授業は「**英語で行うことを基本とする**」
- 4 大学入学共通テストで「**4技能評価、民間資格・検定試験**」の活用

1 小学3、4年生で「**外国語活動**」

- 年間授業時間：**35時間**
- 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむ
- 言葉としての面白さや豊かさに気づく
- 聞く・話すことの言語活動の一部体験

2

小学5、6年生で「教科英語」

- 年間授業時間：70時間
- 成績評価あり
- 活字体の大文字、小文字
- 文および文構造の一部
- 読むこと、書くことの言語活動の一部体験

3

中学・高校の英語授業

- 中学・高校の英語の授業は
「英語で行うことを基本とする」
- 高校では、さらに「論理・表現」の科目新設
「話す」「書く」を中心に発信力を強化し、スピーチ、プレゼンテーション、
ディベート、ディスカッションなどを行う

4

大学入学共通テスト

- 2技能：聞く・読む
 - ▶ 4技能：聞く、話す、読む、書く
- 民間資格・検定試験を活用
- 2024年度以降の英語試験は、民間資格・検定試験に一本化
- 2020～23年度は、共通テストと民間資格・検定試験が併存

すでに拡大している個別大学入試における
「民間資格・検定試験」活用

「GTEC CBT」の大学入試での活用実態



大学入試での活用パターン

- 書類審査
- 試験の代替
- 出願基準
- 加点
- みなし得点化 など

導入年度以降も継続利用予定。詳細は必ず最新の大学発表資料でご確認ください。
文部科学省公表資料などをもとに作成(2017年3月末時点)